様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０６９０

研究課題名（和文）近世後期・明治初期幕領・直轄県の地域社会変容に関する研究

研究課題名（英文）Histrical Studies of Local Administration of Bakufu Feudal Terrrritories in Shinano Province

研究代表者
山崎　圭（YAMAZAKI, Kei）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：６０３１１１６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、信濃国中野・中之条代官所を対象に、近世後期から近代初期にかけての地域社会の変容と支配・運営のあり方について検討した。具体的には、（１）地主と村の関係（主に地主小作関係を通じて）、（２）支配と中間層の関係（主に飢饉への対応を通じて）、（３）中間層と地域社会の関係（堤防や用水路の普請をどのように実現したかの検討を通じて）、の三つの視点で検討した。本研究では相当数の未整理史料を調査・整理して、利用している。

研究成果の概要（英文）：In this study,I investigate the local community of Shinano province in early modern Japan.I consider the role that wealthy farmer played within the community.They were often at odds with the peasants,but also,at the time of famine,they were trying to save the villagers,and in order to build a levee,they negotiated with the government office,and convinced people.I investigate it by examining the old histrical records left in private homes.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近世　幕領（幕府領）　地主小作関係　村定　御救　米穀調達　中間層　地域社会

１．研究開始当初の背景

（１）近世地域社会論については、簡略に述べると、豪農等の中間層が地域において果たす公共的機能が近世後期から近代に連続していく側面を重視する地域運営体制論と、それに対してそのような運営体制の基礎にある各時期特有の社会構造が運営体制をどのように規定しているかを重視する地域社会構造論の二つの動向がある。近年では、この二つの動向をいかに乗り越えていくかという議論も行われている。

（２）このような研究状況を前に進めていくためには、地域を構成する諸階層・諸要素の動向をとらえて、それらの関係を論じることが最低限求められている。研究代表者は、かねてからその視点に立って研究を続けてきたつもりだが、いまだ史料の掘り起こしが十分ではなかったので、今回の研究では、北信地域の幕領（中野・中之条代官所）について検討を試みた。

（３）この地域の周辺では、最近、地域社会内部の米穀流通構造を明らかにした多和田雅保氏の研究や、隣接する松代藩領に関する渡辺尚志らのグループによる多面的な研究などが出されており、地域の全体像をイメージする条件が比較的揃ってきている。また、本研究にとっての主要史料である山田庄左衛門家文書は総計で３万点をこえる貴重な文書群であるが、研究代表者はかつて国文学研究資料館在職中にこの文書の目録を２冊刊行し、また研究分担者として参加した科学研究費・基盤研究（Ｂ）「日本近世・近代の地主・名望家文書を中核とした地域史料の総合的研究」（平成 15～18 年度、研究代表者丑木幸男）等において、残り分もすべて目録化が済んでおり、同家文書に関する共同研究も行われている。このように研究条件は十分に整っている。

２．研究の目的

（１）本研究では、北信濃の幕府領（明治初年には直轄県）を中心とした地域をフィールドとして、近世後期から明治初期にいたるまでの地域社会の構造とその変容、地域支配・運営のあり方について明らかにする。

この地域は地主制が展開した地域だが、本研究では近世から近代への移行期を研究し、いわゆる近代化が地域社会に生きる人々の生活をいかに変容させたのかについても検討する。

近年この地域では、大規模地主山田庄左衛門家をめぐる研究や、穀物流通を主とした経済構造の研究が進み、隣接する松代藩領の藩社会研究も多くの成果を出している状況なので、これらを基礎としたり、比較したりすることで、新しい研究を展開する事が可能である。

（２）そこで、以下の三点の目標を設定した。

第一に、本研究では、小前（小作人）、村、地主・豪農、役所（手代、陣屋元村名主等を含む）等といった諸階層の動向に関する調査を行い、それらの関係を明らかにしようとした。豪農と役所、豪農と小前の関係を分析する研究はもちろんあるが、それで十分とは言えない。

第二に、第一の点を踏まえた上で豪農が果たした役割や地域の中での位置を検討したい。佐々木潤之介『世直し』（岩波新書、1979 年）は、維新政府との関係から豪農層が「特権豪農商」と中小豪農に分裂し、世直し状況が終焉すると述べているが、その「特権豪農商」の例にあげられたのが山田家を含む伊那県商社員の豪農たちであった。このように部分的に取り上げれば、権力と結び付いた特権豪農にもなるし、逆に、堤防組合惣代を勤めて地域を水害から守ろうとした地域リーダーにもなりうる。第一点のような諸関係とその変遷を十分に把握した上でトータルに評価することが現段階の研究水準では必要になっている。

第三に、前回の科研で発見した、村による「村引」や村議定に基づいた村外地主への対抗（および契約の論理に基づく地主側の対抗）という事実の背景を掘り下げて、近世後期の村共同体の性格をいっそう明らかにしたい。この点は、いわゆる近代化の過程で人々の生活がどのように変化するかということと関わる論点である。

（３）未整理史料を発掘し、調査整理することも目的のうちである。このことは本研究に新しい情報をもたらすことはもちろんであるが、地域の史料を発掘して、整理し、残していくことは地域史研究の重要な役目である。本研究では、労力の多くをこの史料調査にさいた。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたって、下記の作業を行った。

（１）山田庄左衛門家文書の調査

山田家文書は、既に整理済みではあるが、東京（国文学研究資料館）と現地（山田家）に分かれて残されているので、現地に出張して必要な史料の撮影を行った。

（２）周辺村々の村役人文書の調査

大規模地主山田家の視点のみで地域を見ていくと、どうしても偏りを免れないため、周辺村々の文書調査を行って、史料や情報の把握に努めた（主に吉田村）。なお、この点に関しては、中野市教育委員会の史料調査事業と協力関係をもつことができたため、本研究費による出張調査の形はとっていない場合も多いが、多くの有益な情報を得ることができた。

（３）陣屋元村の文書の調査
幕領地域社会においては、陣屋元村の郷宿・郡中代らが果たした役割を見逃せない。当初は、中野町村の調査を予定していたが、従来から取り組んできた中之条村（幕領中之条代官所）の史料が幸いにも数多く出てきたため、今回はこちらの調査を優先した。
以上の、（１）～（３）は、いずれも研究代表者単独で調査できる量をはるかに越えているので、中央大学大学院生諸氏の協力を得て、合宿形式で調査を進めた。日昼の調査はもちろん、夜の史料研究会や、現地巡見等でも成果を上げることができた。

（４）地元研究者との交流
当初、研究会を開催するなどして、地元研究者と交流を図ることを計画していた。実際のところ、本研究において研究会の開催はしなかったが、先述した通り、中野市教育委員会の史料調査事業と協力関係をもったため、中野市主催の「ふるさと発表会」（中野市博物館関係の年次報告会）で市民向けに成果を発表する機会を得、地元の研究者、郷土史家たちと意見を交換することができた。

４．研究成果
本研究を通じて、以下の成果を上げることができた。

（１）史料の調査・整理
中野代官所内については、旧吉田村の原伸一氏所蔵文書、竹内知雄氏所蔵文書、竹内行三氏所蔵文書、竹内哲良氏所蔵文書の調査・整理を行った。
中之条代官所内については、中島源雄氏所蔵文書（過去に研究代表者らが調査・整理したが、新出分が見出された）、中島健彦氏所蔵文書、坂城町教育委員会所蔵十一屋塚田家文書の調査・整理を行った。
以上が、未整理史料を発掘して、今回新たに調査・整理したものである。いずれも史料の保存措置を行うとともに、史料情報をデータベース化してある。整理済の史料については、山田庄左衛門家文書はじめ、必要なものを各地で撮影した。

（２）得られた知見
研究成果の第一点は、地主と村の関係についてである。この地域では、近世後期に村が独自のルール（村法）を定めて、小百姓保護のために村外地主の権限行使を規制しようとする中、地主は訴訟の経験を経て証文主義によってこれに対抗したが、近世後期段階では、村・小百姓との関係に規定されて契約・合理主義を徹底しきれなかったことを指摘した。
第二点は、支配と中間層の関係についてである。領主の「御救」機能が減退する幕末にあっても、中間層の活躍に支えられ、諸藩も協力することで、領主の救済機能がどうにか維持されたことを明らかにした。特に、米穀調達をめぐる領主どうしの協力関係については、これまで注目されてこなかった論点だと考えるので、今後いっそう掘り下げる必要があると考えている。
第三点は、中間層と地域社会の関係についてである。この点について成果を論文にまとめることができたのは、境目地域を流れる用水をめぐる村・中間層･諸領主の関係に関する研究である。ここでは、幕領・諸藩領の境目地域の事例を検討し、破損した用水路の修復等に際し、中間層が領知の範囲を越えた結束を見せたこと、また、用水をめぐる村落間相論に際して、領主は安易に自領の利害を最優先する立場をとることなく、他領の百姓であっても、その農業・生活維持に配慮を示している事例を紹介した。これは先に示した「領主どうしの協力関係」ともかかわって、今後掘り下げていくべき論点である。
なお、現在のところ論文作成にまではいたっていないが、①陣屋元中之条村の寺子屋師匠・組頭・取締役の中島家に関する研究と、②中野代官所の千曲川堤防組合の幕末の動向についても、一定定度の調査成果をあげることができたので、これらについては論文化を急ぎたい。①については、中島家が寺子屋師匠として近隣の子らだけでなく、陣屋手代の子らをも教えた関係で、各地へ転勤していく手代たちと中島家は親子ぐるみで手紙をかわしており、そこには様々な情報が含まれている。②千曲川治水については、明治期の直流工事が有名だが、幕末段階の取り組みについては詳細が明らかにされていない。豪農・村役人らは、幕府に様々な働きかけを行い、その過程で、地域内部にあっては利害関係を異にする村々の同意をいかに形作っていくかをめぐって、奔走している。ここから領主と村・地域の間で、活動する豪農（中間層）の立場をうかがいうる。関係史料の主なものは書状で、事態の裏側を伝える記述が多く、たいへん興味深いものである。

（３）今後の課題
フィールドとした地域の中から様々な史料を発掘して、整理分析し、論点を指摘する、その作業を通じて地域像を復元していく作業は、未完である。まだまだ残された史料が無数にある。当面は、今回収集した史料を十分に整理して検討し、成果を上げた上で、また次の史料調査に取り組んでいきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）
①<u>山崎　圭</u>「幕末の境目地域と用水―幕府領中之条代官所･松代藩領・上田藩領の境目―」『政策文化総合研究所年報（中央大学）』、

査読無、17 号、2014 年、3-24 頁

②山崎　圭「慶応二年信州中之条代官所の米穀調達活動について」『紀要・史学（中央大学文学部）』、査読無、59 号、2014 年、73-100 頁

③山崎　圭「日本近世の村・地域社会―幕府領の事例―」『西洋史研究』査読無、新輯 41 号、2012 年、203-214 頁

④山崎　圭「近世北信濃の地主小作相論と幕府代官」『中央史学』、査読有、35 号、2012 年、66-83 頁

〔学会発表〕（計 1　件）
①山崎　圭「日本近世の村・地域社会―幕府領の事例―」西洋史研究会、2011 年 11 月 13 日、立教大学

〔図書〕（計 0　件）

６．研究組織
(1)研究代表者
山崎　圭　（YAMAZAKI　KEI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：60311164